

「じろ」6 Kの変化「平生」のKと「新生」のK

私は平生のKを熟知していたが、平生でないK（新生のK）に絶えず驚かされる。それでは自殺の時点ではKは「平生のK」だったのか、「新生のK」だったのか、考えてみることで、自殺の理由を探っていこう。

Kの平生をふり返ってみよう。

① 136 上 17 「私は彼の結んだ口元の肉が震えるように動いているのを注視しました。彼は元来無口な男でした。平生から何か言おうとすると、言う前によく口のあたりをもぐもぐさせる癖がありました。彼の唇がわざと彼の意志に反抗するようにたやすく開かないところに、彼の言葉の重みもこもっていたのでしよう。いったん声が口を破って出るとなると、その声には普通の人よりも倍の強い力がありました。」

② 140 下 2 「承知のとおり図書館ではほかの人のじやまになるような大きな声で話をするわけにゆかないのですから、Kのこの所作はだれでもやる普通のことなのですが、私はそのときに限って、一種変な心持ちがしました。」↓普段は周りを氣遣うような行動はしない。

③ 143 上 14 「道のためにはすべてを犠牲にすべきものだというのが彼の第一信条なので、それから、撰欲や禁欲はむろん、たとい欲を離れた恋そのものでも道の妨げになるのです。Kが自活生活をしている時分に、私はよく彼から彼の主張を聞かされたのでした。そのころからお嬢さんを思っていた私は、いきおいどうしても彼に反対しなければならなかったのです。私が反対すると、彼はいつでも気の毒そうな顔をしました。そこには同情よりも侮蔑のほうがよくいに現れていました。」

④ 145 上 15 「彼はいつも話すとおりの強情な男でしたけれども、一方ではまた人一倍の正直者でしたから、自分の矛盾などをひどく非難される場合には、決して平気でいられないたちだったのです。」

⑤ 148 上 17 「Kの果敢に富んだ性格は私によく知れていました。」

平生のK

a 「道」を進んでいる。恋愛は道の妨げ。

b 他人のことは気にしない。

c 自分で決定し自分で行動する。

d 口数は多くないが、言葉に自信がある。

e 発した言葉は真実である（正直・表裏がない）。

平生のKはいつからどの点がどう変化したのか？
○次の表記は平生のKのaのどの点に変化しているか？（ ）に書き入れる。

⑥ () 136 上 1 「Kはいつもに似合わない話を始めました。」136 上 10 「Kはなかなか奥さんとお嬢さんの話をやめませんでした。しまいには私も答えられないような立ち入ったことまでできました。私はめんどろよりも不思議の感に打たれました。以前私のほうから二人を問題にして話しかけたときの彼を思い出すと、私はどうしても彼の調子が変わっているところに気がつかずにはいられないのです。」136 下 2 「彼の重々しい口から、彼のお嬢さんに対する切ない恋を打ち明けられた」

⑦ () 140 下 7 「すると突然幅の広い机の向こう側から小さな声で私の名を呼ぶ者がありました。私はふと目を上げてそこに立っているKを見ました。Kはその上半身を机の上に折り曲げるようにして、彼の顔を私に近づけました。ご承知のとおり図書館ではほかの人のじやまになるような大きな声で話をするわけにゆかないのですから、Kのこの所作はだれでもやる普通のことなのですが、私はそのときに限って、一種変な心持ちがしました。」

⑧ () 141 下 5 「一言で言うと、彼は現在の自分について、私の批判を求めたいようなので、そこには私は彼の平生と異なる点をたしかに認めることができたと思いました。……これは様子が違うと明らかに意識したのは当然の結果なのです。」

⑨ () 141 下 14 「私がKに向かって、この際なんでも私の批判が必要なのかと尋ねたとき、彼はいつもにも似ない悄然とした口調で、自分の弱い人間であるのが実際恥ずかしいと言いました。そうして迷っているから自分で自分がわからなくなってしまうので、私に公平な批判を求めるよりほかにしかたがないと言いました。……彼はただ苦しいと言っただけでした。実際彼の表情には苦しそうなところがありありと見えていました。」

⑩ () 145 下 6 「『覚悟、——覚悟ならぬこともない。』とつけ加えました。彼の調子は独り言のようでした。また夢の中の言葉のようでした。」

⑪ () 152 下 15 「しかし彼はいつものとおりに帰ったのかとは言いませんでした。彼は『病気はもういいのか 医者へでも行ったのか』ときました。」

⑫ () 155 下 14 「Kはお嬢さんと私との間に結ばれた新しい関係について、最初はそうですがとただ一口言っただけだったそうです。しかし奥さんが、『あなたも喜んでください。』と述べたとき、彼は初めて奥さんの顔を見て微笑をもらしながら、『おめでとうございます。』と言ったまま席を立ったそうです。そうして茶の間の障子を開ける前に、また奥さんを振り返って、『結婚はいつですか。』ときいたそうです。それから『何かお祝いをあげたいが、私は金がないからあげることができません。』と言ったそうです。」

⑬ () 157 下 15 (遺書) 「それから今まで私に世話になった札が、ごくあつさりした文句でそのあとにつけ加えてありました。世話ついでに死後の片づけ方も頼みたいという言葉もありました。奥さんに迷惑をかけてすまんからよろしくわびをしてくれという句もありました。国元へは私から知らせてもらいたいという依頼もありました。」

新生の K

a …… 変化が (認められる・認められない)
b …… 変化が (認められる・認められない)
c …… 変化が (認められる・認められない)
d …… 変化が (認められる・認められない)
e …… 変化が (認められる・認められない)

○ 新生の K はどういった人間になっているか？

それでも一度 K の遺書を検証しよう。

⑭ 158 上 6 「必要なことはみんな一口ずつ書いてある中にお嬢さんの名前だけはどこにも見えませんでした。私はしまいまで読んで、すぐ K がわざと回避したのだということに気がきました。」 ○ お嬢さんのことを書かなかったのはなぜか？

⑮ 158 下 2 「最後に墨の余りで書き添えたらしく

見える、もつと早く死ぬべきだのになぜ今まで生きていたのだろうという意味の文句でした。」 ○ 「もつと早く」を「スケジュール」A→E 時点と仮定して、その時点よりも早く死ねばどうだったというのだろう？

A 時点 (お嬢さんに恋した時) よりも早く死ぬべきだった。なぜなら ()

B 時点 (恋心を私に告白する時) よりも早く死ぬべきだった。なぜなら ()

C 時点 (私に矛盾を指摘された時) よりも早く死ぬべきだった。なぜなら ()

D 時点 (私とお嬢さんが婚約した時) よりも早く死ぬべきだった。なぜなら ()

E 時点 (二人の婚約を知った時) よりも早く死ぬべきだった。なぜなら ()

A→E であり得ないのはどれだろう？

○ K の自殺の原因を次の枠内の形式に合わせて考えてみよう。

() K が自殺を考えた時は () 時点であり、
() ことは自殺とは関係なかったということが言える。
そして K は (理想に進むため／現実を肯定するため／理想や現実に関係なく) 自殺した。
なぜなら ()

よって「もつと早く」というのは、もつと早く死ねば ()

() ということである。